

令和5年度第1回宮代町立小・中学校一貫教育推進委員会 会議録

1 日時・場所

令和5年6月15日(木) 10:00～11:30

役場庁舎202会議室

2 出席者

審議会委員：15名出席（代理2名）

上田悟委員長、斎藤勉副委員長、木村由美子委員、金野泰久委員、塚越健一委員、高野桂子委員、山口隆夫委員、谷義明委員、栗原利夫委員、長井勝利委員（代理）、白井香花委員、大木莉香子委員（代理）、谷口昌之委員、金子哲也委員、石井大晴委員、土淵早苗委員、山本享美委員

事務局：中村敏明教育長

教育推進課：竹内知子学校管理幹兼副課長

3 開会

4 挨拶

教育長から挨拶

5 任命書交付

6 小・中一貫教育推進委員会委員長の選出

7 自己紹介

8 委員長挨拶

上田悟委員長から挨拶

9 議事

(1) 小・中一貫教育の推進について（事務局）

資料のとおり

(2) 各小・中学校における小・中一貫教育の取組について

①須賀中学校区（須賀中学校、須賀小学校）

②百間中学校区（百間中学校、東小学校、笠原小学校）

③前原中学校区（前原中学校、百間小学校）

資料のとおり

(3) 協議

上田委員長：須賀小・須賀中のSプランについていかがでしょうか。

石井委員：自分も母校なので、須賀中・須賀小のことはよくわかる部分があります。近いからこそできることを大切にして、それにPTAも参加して行っていきたいです。地域も巻き込んで例えば防災等にも連携して取り組んでいけるとよいと思います。

上田委員長：金子会長さんはいかがですか。

金子会長：須賀小・中学校は隣り合っているよさがあると思いますが、逆にデメリットもあるかもしれません。それぞれの中学校区にはそれぞれのパターンがあり、メリット、デメリットがあると思いますので、その辺りをお互い情報共有していただけるとよいのかなと思いました。

上田委員長：私から質問させていただいてよろしいでしょうか。金野委員、先ほどの報告の中に、管理職が仲良くすることが大事とありましたが、そのことについて、どのようなことがあるかをお願いします。

金野委員：例えば、朝の登校時間帯に、本校の子供たちの挨拶をレベルアップしたいということで、私が校門の前で指導していたところ、谷校長先生もすぐに来てくださって、一緒に挨拶をしてくださったり、スクールソーシャルワーカーの上田先生と、谷校長先生と前任の高野校長先生で意見交換できることが新任校長としてとてもありがたいことです。それが、管理職同士がつながっているという一つの例です。

上田委員長：付け加えますが、例えば、小学校2年生の学年主任さんが2組の担任の所に報告や連絡や相談で行くと、2組の子供たちは、「1組の先生と2組の先生は仲がよいんだね。」「チームワークがよいんだな。」と思うそうです。とても大事なことだと思います。それでは、ゆずり葉プランについて、谷口委員、いかがですか。

谷口委員：生徒指導等、小・中の先生同士で取り組んでいるということで、よいことだと思います。小5の次女と中2の長女がいますが、長女は、中1の時に小学校の先生が中学校へ来てくれたことを喜んでいました。また、家で、次女が長女に、「中学校の〇〇先生が小学校に来たよ。」という話をしている、そのような交流が持てることはよいことだと思います。子供同士でもそのようなやり取りができていることもよいと思いました。

上田委員長：土淵委員、いかがですか。

土淵委員：子供が3人いますが、2人、高校に上がりまして、最後の子供が中学1年生になりました。昨年、東小学校で子供たちの様子を伺っていて、個人的な意見になりますが、地域の方との交流が全くないわけではないですが少ないと感じていました。私は、子供がいる世代なので、学校とのかかわりがまだ深いのですが、年を重ねていくと私も関係が弱まってくのではないかと思います。バザー等も開催できないこともあり、地域の方との交流が少ないと感じるところがあります。その辺が、もっと協力的になっていただけるよう、交流をしていただければと思います。中学校に関しては、長く会長を務めさせていただいていますので、校長先生と更に協力を深めながら地域の方や先生方と交流を深められたらよいと思います。

上田委員長：白井委員いかがですか。

白井委員：皆様の話伺い、いろいろなことがあるのだなと感心しました。先週の火曜日に小・中特別支援学級の交流会を開催していただきました。先生方も、小・中の子供たちも皆、楽しく活動していてよかったです。このような交流に保護者がもう少し入れるとよいと思います。大きい子も小さい子も一緒に活動し、そのつながりがとても大事だと思います。子供たちの姿を保護者にもっと見てほしいと

思いました。

上田委員長：Mプランについて山本委員、いかがですか。

山本委員：娘は前原中の2年生、息子は百間小の4年生です。支援学級に在籍していて先生方が手厚く指導してくださり、本当にこの連携のとおりだと私は感じています。これまでは、コロナ禍で挨拶ができませんでしたが、これからは挨拶ができる環境になっていけばよいと思いました。名札をつけていないということに関しては、顔と名前が一致しないことが保護者としては不便です。子供たちの安全を守るためには名札をつけない方がよいかもしれませんが、保護者としてはどういってお友達と関わっているかを知りたいということがあります。

上田委員長：向井委員いかがですか。

向井様（大木委員代理）：私は各校、英語の教育に力を入れているということがよくわかるのですが、英語だけでよいのかと思います。宮代町の歴史、文化、特色等についても言い伝えであったり、校区の町の作りがどうであったかや土台がどうであったかを子供たちに教えていくということも一貫教育の中での子供を創るというところの大きな要素になってくるのではないかと思います。先日、委員長がおっしゃっていましたが、育った子供たちが大人になってから町に戻りたいという思いを持つように育てるのであるならば、宮代町のことを教育していく、宮代町の特色を普段の教育の中にもっと入れていただくことが必要だと思いました。そのようにして、学校の特色を出していただければ保護者としてありがたいです。宮代町は、自由学区で、百間小学校を選ぶ、前原中学校を選ぶというお子さんがかなり減ってきていますので、そういうところにもつながると思います。

上田委員長：とても貴重な意見だと思います。英語だけではなく、英語プラス何かをとということでした。

向井委員：宮代町の歴史です。

上田委員：3、4年生でも宮代町の学習をしますからね。山口委員、いかがですか。

山口委員：町のことを知るということについてでよろしいですか。笠原小学校では、大変環境が恵まれているということがありますので、学校の良さを知るということで、2年生が先日、ゲストティーチャーの八木橋先生を招いて山崎山の観察に生活科の一環として行きました。そこでは、絶滅危惧種の昆虫を発見したり、蛇を見たり、ノコギリクワガタを見たり、そうしたことで笠原小学校の良さを発見する、そのような学習も年間計画に入れ現在取り組んでいます。

上田委員長：こちらからテーマを作りますのでよろしくお願いいたします。教育長からもありました「中1ギャップ」についてはいかがでしょう。中学校の先生方に伺います。状況や課題等、栗原委員いかがですか。

栗原委員：私は、小学校の担任を5、6年2回、教頭としても小学校と中学校を経験して、また小・中のパイオニアスクールという小中連携について2年間研究をしてきました。小・中両方でいろいろ行ってきた自分の経験から、小学校と中学校の先生がお互いの顔を知っているとそれは子供たちにもつながります。お互いが学校に顔を出したりすると。子供たちは、新しい環境へ行ったときに、友達のことであったり先生のことであったり、かなり不安に思います。そこが中1ギャップとなり、学校へ出てきたくないということにつながる場合があります。そういった意味で、宮代町の取組がこのようにつながっていることは、大変素晴らしいことだと思います。益々進めることで、小学校からの中1ギャップ解消につながります。小学校の丁寧さや中学校の組織的なよさがあります。頑張りすぎると働き方改革についての課題にふれてしまいましたが、PTAも巻き込んで行っていくと取組がより膨らんでいくのではない

かと思えます。

上田委員長：谷委員、いかがですか。

谷委員：かつての学校では中1ギャップを感じることもありましたが、須賀小・中は近いこととか、1校1校の関係、つまり、そのまま上がって来るとか、先生方も顔見知りが多いとか、須賀中の前を通って須賀小の先生が通勤するとかということがあり、その中で先生方が手を振ったりとかして自然な交流があります。昨年度、小学校へ伺った時も児童が私の顔を知ってくれているので、私が須賀中の前にいるときにも挨拶をしてくれたりします。今年は、金野校長と登校指導中に話をしていました。そういう姿を子供たちは見てくれていると思えました。今はそれほど意識していない中で交流ができていくという感覚です。

上田委員：柿沼様、お願いします

柿沼様（長井委員代理）：今年度から小・中相互授業参観を取り入れました。実際、本校から百間小の方へ1週間授業参観に出かけています。教職員が小学校の授業を観たことがない、どんな授業をしているか知らないということでしたので、どんなことを教えているかは学習指導要領等を見ればわかりますが、実際、どんな雰囲気やどんな展開をされているのか、まず、見に行くことがよいと考えました。須賀小・中学区は支援担当訪問の際に機会を設けていらっしゃるということでしたが、まずは普段のありのままを見に行かせていただき、中学校もありのままを見せるということにしました。そこから、今年1年、どう学力向上につなげていくか考えていくことにしました。戻ってきた教職員はとてもよかったと皆が言っていました。まず、児童の様子はもちろんですが、自分たちの授業の在り方を振り返って、中1ギャップになる可能性があると言っていました。小学校では先生方が丁寧に授業をされていて、そこから教科担任制で展開が変わってしまっていて、と考えると、そのようなところを改めていこうということになりました。来週は百間小学校から先生方がお見えになるので、ありのままを見ていただき、1年間の研究にしていきたいと思えます。

上田委員長：送り出している方の高野委員お願いします。

高野委員：中1ギャップという言葉は昔からで、小学校から言えば、小1プロブレムというものがあります。幼児教育から小学校教育へのつなぎにもいろいろな課題があるのですが、現在の学習指導要領では、幼児教育施設から小・中学校教育までずっと学びをつないでいくということが特徴になっています。その中でも9年間をいかに過ごすかということが重要で、社会的にも求められていることと思えます。小学校から送り出した子たちが、中学校でどのように学んでいるかは、百間は一見に如かずで行かせていただくと教員の意識も変わりますので、そういった機会は重要ですし、子供たち自身も安心して中学校へ行けるように、中学校の先生方も安心して受け入れていただけるように、子供たち同士だけでなく、教員も交流が大事だと思います。かえで学園からするといろいろなことが進歩していますが、そこが重要だと思えました。

上田委員長：塚越委員、お願いします。

塚越委員：今年の中学1年生、昨年の6年生ですが、課題を抱えているお子さんもいらっしゃるのですが、中学校の先生と本校の教員、管理職が加わっての情報交換、話し合いを行いました。その子の中学での姿を見て、連携、話し合いは重要であることを感じました。それが生きているのだろうと思えました。職員が話し合っただけで情報共有していくことが、子供たちが安心して学校生活を送れるための初めの1歩であると感じました。これからも、先ほどの授業の相互参観も含め、我々教員が密に連携をとりな

がら取り組んでいけるといいと考えています。

上田委員長：百間小と前原中の入学説明会の時、部活のことを説明したり、ちょっとした体験をさせたりと、中学校では部活という意識が多いと思いますので。9年間ということを強調された山口委員、いかがですか。

山口委員：それぞれの学校に9年居させていただいたことがあります。1校ずつ小1、中1という点で、人間関係づくりに重点を置いて交流を図っていく必要があるかなということを感じています。

上田委員長：須賀中、石井委員いかがですか。

石井委員：仕事で21年間勤務していて、今は小学校に勤務していますが、小学校の先生はすごいという思いがあります。私は16年間中学校に勤務していて中学校に勤めているときは、小学校の先生なんてと思っていました。というのは、小学校からの申し送り、あまりよくないという生徒がいましたが、中学校へ来ると生徒会長をやったりということがありました。小学校の先生の見方に疑問を持つことがありました。けれども、今は、小学校の先生の手厚さであったり、子供に対する姿勢であったり、保護者に対する対応だったり、勤務時間の制限がある中で、先生が本当によくやってくださっています。保護者からの信頼もありますし、子供たちからの思いも良いです。一番感じるのは、6年生が綱引き大会の練習をしているのですが、自分たちで学んで、自分たちでしっかりとコミュニケーションをとってディスカッションして話し合いをした中で、どのように課題を解決していくかということ子供たちにさせています。ヒントを教えて答えを教えない指導、自分も中学校時代、そのように教わってきました。小学校6年生は、本当に何でもできます。鼓笛もできるし、中心となって進めるし。でも、中学校へ上がってくるとできなくなる。幼稚園の年長はできるけれど、小学校1年生になるとできない。結局、中学校の教員が中学1年生として見てしまう、一番下の学年として見てしまう、ではなくて、9年間というプランの中で7年目の義務教育というように考えると中学1年生になった時にできるのかなと思います。中学生は児童から生徒になり、大人になっていくので、その中で対応としても大人にしていかなければいけないと思います。うちには高校1年生と高校3年生がいますが、高校生は自分で決めてきます。そういうふうにステップアップして我々のように社会に出ていくことができるようになるのが9年間という大事な時期だと思います。そのようにしていけば、中1ギャップはなくなってくるのではないかと思います。

上田委員長：私は、毎月各学校を訪問しています。8年目になり、4月、5月はいろいろ気にして心掛けます。中1ギャップという言葉が浸透していますが、新しい言葉を考えています。中1アップです。中1ギャップになる子は、私は100%小学校のうちにSOSを出していると思います。小学校でも気付かない、中学校でも気付かない、または気付いているけれども頑張るだろうと期待している、中学校1年生だったら環境が変わったというギャップでアップされている子もいるのではないかと思います。SOSを出している子には、常に目をかけていかなければいけないと思います。木村委員さんお願いします。

木村委員：中1ギャップについては、コロナが2類から5類になり、行事や交流がいろいろ戻ってくると思いますが、自分の子供を見ていると、中学生に陸上を教わったり、鼓笛の演奏を教わったり小学生のうちから中学生との交流があったり、それを教えてもらった先生の顔を知ること、ほっとするとか、知っている先輩の顔を見て安心するとか、スムーズに中学校へつなげることができました。町で考えた時には、町のかつた大会や綱引き大会、陸上大会とかで他の学校の友達顔見知りができ、町全体で

の児童生徒との交流がありました。行事が回復して、町の先生、生徒さんの顔が見られることはよいことだと思います。地域を巻き込むということについては、下校中の子供たちが挨拶をしてくれています。下校指導や見守りをしてくださっているお母様たちが、若い世代まで広がっていることを感じています。気軽に地域に関われるという安心感も子供たちが持てるようになると思います。

齋藤委員：先生方の御報告をいただいて大変だと思いました。コロナ禍、働き方改革の中、制限された時間の中で何をしていくかを考えることはとても大切なことだと思います。やっつけてくださっていることに感謝申し上げます。質問したいのですが、町の基本計画の研究課題ですけれども、9か年間の発達段階に応じた教育区分とは、義務教育学校が念頭にあるということですか。

竹内学校管理幹兼副課長：現在は義務教育学校が念頭にあるということはありません。各学校が9か年を見通してプランを作ってくれているということで、9年間をひとまとめにしてという考えの区分です。

齋藤委員：区分とはどういうことですか。小・中で区分するということですか、小・中学校でまとめて区分するということですか。

竹内学校管理幹兼副課長：この小・中一貫の取組の中で9年間をひとまとめにしてという意味です。

齋藤委員：それから教科担任制とはどういうことですか。イメージ的に高学年を想定しているのか、教育長は検証すると学力が上がるのかという検証結果の話をしていました。この取組の進捗状況をお聞きしてもよろしいですか。

竹内学校管理幹兼副課長：県では小学校での教科担任制を進めるということで、加配をつけていただいています。小学校では、2校に1人ずつ英語の専科加配をいただいています。その教員が3年生から6年生の英語の授業をしています。また、笠原小学校には、専科加配をいただき、音楽を担当しています。加配がない学校も担任外の教員が音楽については専科で対応しています。それに加えて、今年度から、県では高学年専科加配という加配を作りました。働き方改革を進めるという観点からの加配ですが、この加配は宮代町にはついていません。その他、学校ごとに工夫していただき、高学年の学年内で教科担任制を導入し、中学校での教科担任制に慣れさせるような取組もしていただいています。

齋藤委員：とても興味がございます。高学年の社会、理科はとても内容が高度で、中学校の内容にもものすごく近いです。小学校の先生は、指導書を見ていて、これは無理かなと思いました。免許を持っている、持っていないではなくて、効率的な指導をするのであれば、小学校は、1回しかその単元を教えないです。中学校の教師は3回やったり4回やったりします。同じ内容が濃くなったり、指導力がついていったりするのです。そうすると免許があるかないではなくて、教科を交換したりするという方法を1つのアイデアとしてやってみるのもいいと思います。それが果たして、先ほど教育長の話していた学力の向上にどうつながっていくのかということを知りたいと思いました。専門の方が教えた方が学力が上がるだろうということは仮説にしか過ぎなく、やってみたら上がりませんでしたということになるかもしれません。本当は担任が教えた方が上がったとか、先ほど話にあった宿題の量についても、各教科担任がついたらバラバラに出してしまっかえって子供たちの学習時間を圧迫させてしまうとかというところを私は知りたいと思っていました。3点目は、教育の相互交流についてです。私は過日、千葉県にあるおおたかの森中学校へ行きました。流山は子育てについていろいろな面で注目されているところです。そこの中学校へ行きましたら、同じ敷地内に小学校があるんです。職員室が1つなんです。完全に究極だと思いました。相互交流云々ではなくて、同じ敷地内にある学校で職員室を1つにすれば、そこに子供は来るし、先生方はそこにいるわけですから、当然自然的にうまくできるのかなと思

います。イメージ的には例えば須賀小学校、須賀中学校が共同体育館を使っているのであれば、同じような形で、ハード的にどうするかが課題になると思うのですが、そういう方法もあると思いました。横に長いスタッフルームで、両端に校長先生の席があって、ある時はパーテーション等で区切るようになるんですけども、通常は子供たちが両方行き来しています。ただし、建物は別なんです。その中で意識的に交流しているということが自然にできている感じでした。見て、こういうものが入ってくると更に小・中の連携が進むという印象がありました。

上田委員:学力の向上という話が出ましたが、ある学校へ行ったとき、先生が「学力の向上がなかなか・・・。」という話をしていました。私は「簡単ですよ。」と言いました。1つは教材研究する時間、2つ目は学級事務をする時間をたっぷり作れば学力を上げるんです。しかし、働き方改革の中、会議や出張が多く、校長先生方は本当に苦勞されていると思います。先生方は、中学校の先生、小学校の先生の名前と顔がわかりますか。私は、8年間、長く学校に行っていますので、おかげさまで、小学校の先生は80%顔と名前が一致します。中学校は、須賀中学校は100%近いですが、前原中学校と百間中学校は4割ぐらいです。名前を知って顔が一致していると会話が全然違うと感じます。最後に私の好きな歴史上の人物の話をして。宮本武蔵です。宮本武蔵は生涯1度も負けたことがない、100回ぐらい試合をして1回も負けたことがなかったそうです。でも事実は違います。ほとんど弱い人とばかり戦っていたのです。だから勝てた。佐々木小次郎の巖流島の戦い、あれも事実は違います。佐々木小次郎は、何と16歳の子供だったんです。宮本武蔵の生涯を書いてある本が五輪書と言います。読んだ方いますか。その中に、戦術と戦略の違いというものがありません。戦術というのは、宮代の7校に当てはめると、小・中一貫校の目標がどの程度達成されたかを見ると、1校達成の場合は戦術、6校達成した場合も戦術、7校全て達成した場合が戦略と言うそうです。3月にもう1回会議がありますが、Sプラン、ゆずり葉プラン、Mプランの報告を楽しみにしています。0.1歩進んだら、私は戦略だと思います。これで協議の方を終わりにしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

10 その他

事務連絡

11 閉会